

市立幼稚園統廃合案で

23園中、最終的に存続するのは9園との答申案

10月13日、第12回幼稚園再編整備検討委員会が開かれ、最終的に教育長に答申として出す案が審議され、全市23幼稚園のうち最終的に存続するのは9園、あとの14園は廃園となり、形としては同じ中学校区での統合または

保育所との「幼保一元化」とする方向が確認されました。（別表）

中学校区	幼稚園名	存続
鈴峰	椿	
	庄内	
	深伊沢	
白鳥	加佐登	
	石薬師	
	井田川	
平田野	国府	
	庄野	
創徳	飯野	
	牧田	
神戸	神戸	
	河曲	
	一ノ宮	
天栄	天名	
	栄	
白子	旭が丘	
	稲生	
鼓ヶ浦	白子	
	愛宕	
千代崎	玉垣	
	若松	
大木	箕田	
	長太	
計	存続9	廃園14

なぜ「中学校区」なのか？

この答申案は、少子化と保育所へのニーズの変化などにより、幼稚園の多くが定員割れとなり、中には10人前後になり適正な集団保育が出来なくなってきた、との認識のもとに「費用対効果」の面から見直しをはかるとして、出されたものです。

しかし答申案は、幼児の生活圏ではない「中学校区」での統廃合を求めている、廃園になる所は同じ校区の他の園に行けばよい、との立場です。これは小学校に併設されているという鈴鹿の幼稚園の特色を無くするものです。また一方で保育所や私立幼稚園は、中学校区と関係なく広く子どもを集めています。市立幼稚園だけは中学校区でまとめてしまえという論理は、公平ではありません。

答申が出て、その具体化には多くの関係者の声をしっかり聞くことが求められます。

イラクへの自衛隊派遣は憲法違反

9条の会すずか学習会で岡村晴美弁護士が語る

10月18日、ジェフリー鈴鹿で「9条の会すずか」の第19回学習会が開かれ、2008年4月に出された「イラク自衛隊派遣違憲判決」について、名古屋の弁護士で原告でもあった岡村晴美さんの講演を聞きました。

この判決は、マスコミではあまり大きく取り扱われていませんが、その内容はひじょうに画期的で、「平和憲法」の精神をまっすぐに表わした、論理的にもハッキリとした文章で書かれています。

私たちは9条を持ちながら、戦争に加担している

イラクの首都バグダッドは「戦闘地域」である。その戦闘地域へ空輸をすることは、自らも武力の行使を行なったとの評価を受けざるを得ない行為である。しかも空輸したのは、大半が武装した多国籍軍（主にアメリカ軍）の兵員である。空輸した時期、米軍はバグダッド掃討作戦を強化し、子どもを含む民間人を多数死亡させた。したがって、航空自衛隊が行なった活動は、「武力行使」すなわち実質的な「戦争」であり、憲法9条1項違反である。

岡村さんはこの判決を、「良い判決でよかったね」では済まされない、「我々への有罪判決」である、すなわち「9条を持ちながら、実はすでに戦争に加担している」という現実を直視しなければならないと語りました。

晩秋の近江路を旅しませんか？

鈴鹿市後援会の秋のバス旅行、今回は滋賀県です。

とき 11月29日（日）
行先 近江八幡の町並み散策と
琵琶湖博物館
参加費 5000円（昼食付き・子ども3000円）

先着90人で締め切ります。お申し込みはお早めに。

観光客が来る商店街「昭和の町」

10月21日～23日、共産党鈴鹿・亀山市議団で、宮崎県綾町、宮崎市、大分県豊後高田市を訪問、視察しました。豊後高田市では、中心商店街が往年の賑わいを取り戻そうと、昭和30年代の町並みを復活させた「昭和の町」。ガイドさんの案内で町をめぐり店に入り、その元気な姿を体感しました。「時代から取り残された」まま残っていた町が、今いちばんの財産になっているのです。（右写真）

駐車場には観光バスがぎっしり止まり、通りもにぎやかでした。



照葉樹林を守り有機農業で町おこし



綾町は広大な照葉樹林の伐採をストップし、豊かな自然環境を守り、農業も化学肥料や農薬を排除、消費者に信頼され愛される有機農業に転換しました。

町として自然生態系農業の推進条例、農業の安定かつ総合的振興の条例を制定、堆肥供給施設や大消費地への産直販売、宮崎市での直売所設置など、しっかりと力を入れています。左写真は、町役場となりの「本物センター」。町民が作った新鮮な農産物がたくさん販売されていました。

子育て環境ランキング1位の宮崎市

宮崎市は、NPO法人が全国主要都市の「次世代育成環境」を評価したランキングで、第1位となりました（ちなみにビリの51位は横浜市）。市役所で子育て施策の全体像を聞き、充実した保育所、児童館や学童保育、児童公園やプール、医療費助成など、総合的に児童福祉が進められていることが分かりました。民生費が総予算の34.5%という多さにも驚きました。

ずいそう



映画になった「沈まぬ太陽」

山崎豊子の長編小説「沈まぬ太陽」が映画になったので、さっそく観に出かけた。上映時間3時間22分、途中で10分休憩が入るといふ長さを感じないほどの、感動的なドラマであった。主人公が配転されるカラチ、テヘラン、そしてアフリカのナイロビの風景、今も記憶に鮮明に残る日航機墜落の現場・群馬県御巢鷹山の生々しい映像も、小説とはまた違った迫力をドラマに加えているし、主演・渡辺謙の苦難に耐える寡黙な姿も魅力的である。

ちょうど新政権のもとで、日本航空の経営危機が大問題になってきている中での上映というのもタイムリーで、「この映画はフィクションで、実在の人物、団体とは関係ありません」と断っているが、誰もそうは思わない。この映画の時代、20年前に根本的な改革を出来なかったから、今の危機があることが、この映画で本当によく分かるのである。

「矜持」という言葉のもつ意味、人間の値打ち

主人公・恩地元のモデルとなった小倉寛太郎氏（故人）は、日本航空のエリート社員であったが、労働組合委員長として社員の労働条件改善と空の安全に尽力し、現場労働者の信頼も厚かった。そこで経営陣は小倉氏を海外僻地にとばして屈服させようとしたが、小倉氏は海外に10年、帰ってからも閑職というむごい仕打ちに耐え、けっして仲間を裏切らなかったのである。

共産党の不破哲三氏は小倉氏と東大の同期で、この小説が週刊誌に連載中のとき、「ひょっとすると、この主人公は君のことか？」と小倉氏に電話で確かめたとのエピソードを読んだことがあるが、実際の小倉氏も謙虚で優しい、しかし信念は曲げずつらぬき通した人物である。

監督の若松節郎氏は、この映画は「男の矜持（きょうじ）を描いた」と語っている。広辞苑では「矜持・自分の能力を信じていただく誇り、自負」となっている。「仲間を守るとか責任を果たす、そういうことが今を生きる我々に欠けているように思われます。」「これはまさに今の時代に向けた映画です。不屈の精神と強い信念を持った男の生き方は、きっと皆さんに勇気と希望を感じていただけると信じております。」と、若松監督は語る。「沈まぬ太陽」は、今を生きる我々への力強い応援歌である。